



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 自伝的記憶の無意図的な想起に関する実験的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 雨宮, 有里, 関口, 貴裕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2110">http://hdl.handle.net/2309/2110</a>

## 自伝的記憶の無意図的な想起に関する実験的検討\*

雨宮 有里・関口 貴裕

教育心理学\*\*

(2003年10月31日受理)

### 1. はじめに

「中学校の修学旅行で奈良公園にいった」楽しい記憶や「受験の面接で、緊張してうまく答えられなかった」苦い記憶など、我々は様々な出来事の記憶、すなわち思い出をもっている。このように、過去に経験した個人的な出来事に関する記憶を自伝的記憶 (autobiographical memory) という。自伝的記憶は、時間や場所の情報が付随しているという点において、エピソード記憶 (episodic memory) の一部である。しかし、両者は必ずしも同じものではない。自伝的記憶とエピソード記憶は、「自己」に深く関わるものであるか否かという点で区別される (Brewer, 1986)。「自己に深くかかわる出来事」というのは、感情が喚起された出来事や自分にとって重要な出来事などをさす。例えば、「中学校の修学旅行」は心踊る楽しい体験であるし、「受験の面接」は進路をきめる重大な出来事だろう。このように、自己が積極的に関与した出来事の記憶を自伝的記憶と呼ぶ。一方、「昨日家の前を救急車が通った」というような記憶は、その光景を見たという受動的な経験に関するものであるため、自伝的記憶とはみなされない。

日常場面において自伝的記憶を想起する場合、二つの形態が考えられる。ひとつは、友人に「夏休みは何をしていたの？」などと尋ねられて、過去の経験を意図的に、すなわち思い出そうとして思い出す場合である。そして、もうひとつは思い出そうという意図が無いにもかかわらず、自伝的記憶が勝手に意識にのぼってくる形態である。例えば、「昔よく聞いていた音楽を偶然耳にし、当時の出来事を思い出した」などがこ

れにあたる。この「想起の意図がないにもかかわらず、自伝的記憶が意識にのぼってくること」を、自伝的記憶の無意図的な想起 (involuntary recollection of autobiographical memory, involuntary memory ; e.g, Salaman, 1970) という。一般的に「自伝的記憶」といった場合、前者の意図的な想起をさす。しかし、自伝的記憶の想起の形態としては、両者とも頻繁に体験しているものであろう。

自伝的記憶の研究は、これまで主として前者の意図的な想起を対象におこなわれてきた。これらの研究において盛んに検討されてきた問題に、どのような自伝的記憶が想起されやすいのかという問題がある (総説として神谷, 1994)。その代表的なものとして、不快な出来事と快い出来事は、どちらがより想起されやすいかを扱った研究があげられる。例えば、Waldfoegel (1948) は大学生を対象として過去8年間の出来事の想起を求める研究を行っている。その結果、想起された出来事は、快：不快：中性の順に5：3：2の割合であり、快な出来事の想起率のほうが不快な出来事の想起率に比べて高かった。また、Steckle (1945) は、特定のエピソードを、時間間隔を置いて二回想起させるという実験を行っている。その結果、快エピソードのほうが、不快エピソードよりも再想起率が高いことが明らかにされた。同様の結果は、自分自身の日常生活における出来事とその快・不快度や感情喚起度などを記述し、その後それらを想起したWagener (1986) の研究からも得られている。保持期間や重要度などの影響で、快エピソードの優位性が認められない場合もあるが (神谷, 2003), 自伝的記憶を意図的に想起する際には、快い出来事のほうが、不快な出来事よりも想起されやすいといえる。

\* An experimental study on involuntary recollection of autobiographical memories / Yuri AMEMIYA, Takahiro SEKIGUCHI

\*\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

では、もうひとつの想起形態である無意図的な想起の場合は、不快な出来事と快い出来事のどちらが思い出されやすいのだろうか？自伝的記憶の無意図的な想起に関する研究では、日誌法を用いて不快な出来事と快い出来事の想起率について検討したものが報告されている。日誌法とは、日常生活の中で何らかの出来事を思い出した際にその内容や想起状況などを、その都度、被験者自身がノートに記録していくという方法である。Berntsen (1996) の研究では、快い出来事のほうが不快な出来事よりも、無意図的に想起されやすいと報告している。また、自伝的記憶の無意図的な想起は何の刺激もないところで生起するのではなく、想起のきっかけとなるような外的な刺激が存在することを見出している。しかし、同様に日誌法を用い、4年間に渡り自伝的記憶の無意図的な想起を検討した神谷 (2003) の研究では、不快な出来事のほうが快い出来事よりも想起されやすいという結果が得られている。このように、自伝的記憶の無意図的な想起については、快い出来事と不快な出来事のどちらが想起されやすいかについて、同じ研究法を用いても矛盾した結果が得られている。

では、なぜ、自伝的記憶の無意図的な想起では、意図的な想起のように、想起率と感情価の関係について一貫した傾向が浮かび上がってこないのだろうか？その原因として、これまでの先行研究が日誌法によって行われてきたということがあげられる。日誌法による研究では、多くの場合、実験者本人を被験者とした単一データか、少数の被験者から得られた結果をもとに、無意図的な想起の性質について検討している。そのため得られたデータは、個人差という誤差を多く含んだものである可能性が高い。例えば、日誌法の記録期間中、快い出来事を不快な出来事よりも多く経験した被験者は、不快な出来事よりも快い出来事のほうを多く想起するだろう。また、想起時に被験者がネガティブな気分であった場合は、不快な出来事の想起が促進され、不快な出来事の想起率が高くなるということも予想される。被験者数が少ないということは、こうした個人差がデータに大きく影響するということになる。また、実験者以外の複数のサンプルを対象とした場合、記述の仕方や観点が、個人によって違うため、得られたデータを統一的に分析することが困難になる。さらに、プライバシーにかかわるエピソードは、想起されても報告されにくいといった問題もある (神谷, 2003)。こうした日誌法のもつ手続き上の問題のために、自伝的記憶の想起率と感情価の関係について一貫した結果が得られにくかったのではないだろうか。従

って、自伝的記憶の無意図的な想起については、多数の被験者を対象に、より統制された方法で検討を行う必要があると考えられる。

そこで、本研究は自伝的記憶の無意図的な想起を実験的に扱うための新たな方法を考案することを第一の目的とする。自伝的記憶の意図的な想起を扱った研究では、刺激語を呈示しその言葉を手がかりとして自伝的記憶の想起をもとめるという手法が多く使われている。しかし、本研究は無意図的な想起を対象としているため、記憶の想起を直接促すことはできない。そこで、被験者にダミー課題として手がかり語の印象評定をさせ、その間に何か思い出したかを印象評定後に問うというという手続きを用いた。この課題では、被験者は過去の出来事を意図的に思い出そうとはしない。そのため、印象評定の間に想起された記憶は、手がかり語により無意図的にひきだされたもの、すなわち、自伝的記憶の無意図的な想起であると考えられることができる。

本研究ではさらに、不快な出来事と快い出来事のどちらが無意図的に想起されやすいかについて検討することを第二の目的とする。自伝的記憶の無意図的な想起には、想起のきっかけとなるような外的な刺激が存在することが示されている (Berntsen, 1996 ; 神谷, 2003)。そこで、本研究ではネガティブな感情価をもつ刺激語とポジティブな感情価をもつ刺激語を手がかり語として用い、不快な出来事と快い出来事の想起率を比較する。一般的に「葬式」などのネガティブな感情価をもつ単語は、肉親や友人の葬儀など、不快な自伝的記憶につながっていると考えられる。反対に、「結婚」のようにポジティブな感情価の単語は、友人の披露宴の様子や自分がプロポーズしたときの思い出など、快い出来事とむすびつきが強いと予測される。そこで、本実験では自伝的記憶の想起を促す手がかり語の感情価を操作し、それに一致した感情価を持った出来事を想起させるという手続きを用いた。自伝的記憶の無意図的な想起に関して、日誌法を用い複数の被験者のデータを分析したBerntsen (1996) の研究では、快い出来事のほうが、不快な出来事よりも想起されやすいという結果が得られている。もしこの結果が無意図的な想起の性質を正確に反映しているとしたならば、本実験においても、快い出来事のほうが不快な出来事よりも想起されやすいという結果が得られると予想される。また、本研究では想起された出来事についてどのくらい鮮明に思い出されたかという鮮明度、想起された出来事のおこった時期、想起された出来事がどのくらい特別なものかという特殊性についても調査し、

自伝的記憶の無意図的な想起の性質について検討する。

## 2. 方法

### 2. 1 被験者

東京学芸大学学生73名（男性28名／女性45名；年齢19歳～24歳）

### 2. 2 要因計画

刺激語の感情価（ネガティブ・ポジティブ）を被験者間要因とした一要因計画。

### 2. 3 刺激材料

漢字二字熟語の心像性・感情価・学習容易性に関する五島・太田（2001）の基準表に記載された単語のなかから刺激語を選定した。まず、感情価が2.23以下（全平均の1SD以下）のものをポジティブ語の刺激として64語、5.78以上（全平均の1SD以上）のものをネガティブ語の刺激語として53語、合計117語選びだした。次に、選び出された単語のなかから、被験者にそれに関する経験があきらかにならないと思われる単語（例：空襲）と抽象語（例：残念）を除外した。その後、残った単語の中から、心像性の値が5.5以上、親近性の値（天野・近藤, 1999より）が5.8以上と、値が高いものを選定した。最後に、心像性と親近性の平均値が、ネガティブ語とポジティブ語でほぼ同じ値（平均値の差が0.3以下）になるように、刺激語として用いる単語を選んだ。刺激語の数は、ネガティブ語8語（死亡、発熱、通夜、罰金、火災、病室、墓地）、ポジティブ語8語（応援、結婚、快晴、進学、元日、首位、日曜、満点）であった。一人の被験者に与える刺激語は、ネガティブ語かポジティブ語のいずれかであり、8語の中から4語が呈示された。刺激語4語の組み合わせ（刺激語リスト）はネガティブ語条件で5種類、ポジティブ語条件で6種類であった。これらは以下の手順で作成した。まず、各条件の8語の単語を、意味的に関連した語（例：通夜 死亡）が同じペアに入らないよう、4つのペアに分けた。このペアを2つ組み合わせ、4語からなる刺激語リストを作成した。その際、意味的に関連した語が同じ刺激語リストに入らないよう配慮した。こうして、ネガティブ語5種類、ポジティブ語6種類の刺激語リストを作成した。

これらの刺激語リストを、A4サイズの冊子に印刷して呈示した。冊子の1枚目は年齢・性別・学年を問うフェイスシートであり、2枚目にはダミーの印象評定に関する教示文と練習用の項目が印刷されていた。

その後、評定用の刺激語と評定項目が一枚につき一語づつ、4枚続いた。刺激語の印象評定に用いた評定項目の形容詞対は、17対であった。これらの形容詞対は、SD法の尺度から、今回の刺激語である名詞の評価として、あてはまりにくいと考えられる形容詞対（例：動きのあるーとまった）を除いたものを使用した。刺激語の呈示順序には2種類のものがあり、ネガティブ語の刺激語リスト5×呈示順序2、ポジティブ語の刺激語リスト6×呈示順序2の計22種類の冊子が作られた。

印象評定用の用紙4枚に続いて、7枚目からは自伝的記憶の無意図的な想起について調査する質問項目が印刷されていた。質問項目は1) 自伝的記憶が無意図的に想起されたか、また、された場合はどのくらい鮮明に想起されたか、2) 想起された出来事の具体的な内容、3) 想起された出来事が起こった時期はいつか、4) 想起された出来事は快い内容か不快な内容か、5) 想起された出来事はありふれた出来事か特別な出来事か、6) 複数の出来事を想起した場合の想起内容、の計6種類であった。まず、7枚目の用紙には、自伝的記憶が無意図的に想起されたか、また、された場合はどのくらい鮮明に想起されたかについて問う質問項目が印刷されていた。ページの一番上に「先ほど、言葉の印象を評価していただきましたが、その際にそれらの言葉をよんで何かこれまでに経験した出来事を思い出しましたか？ 思い出したとしたら、どのくらいはっきりと思い出しましたか？それぞれの言葉について当てはまるものに○をつけてください。」という教示文が印刷されていた。教示文の下には、4つの刺激語が、それが呈示された順序で記されており、それぞれの横に（1：何も思い出さない、2：ややぼんやりと思い出した、3：ぼんやりと思い出した、4：はっきりと思い出した）という評定尺度が印刷されていた。つづく8枚目の用紙には、刺激語が4語印刷され、それぞれの横に、刺激語から想起された出来事がどのような内容であったかを答える欄が印刷されていた。9枚目の用紙には、紙の上部に刺激語が一語記されており、その下に刺激語から想起された出来事について問う複数の質問項目が印刷されていた。一番上に「この出来事は、いつごろの出来事ですか？」という教示文とともに、評定項目（1：小学校入学前 2：小学校1～3年 3：小学校4～5学年 4：中学校 5：高校 6：高校卒業以降）が印刷されていた。その下に、想起された出来事の感情価について問う「この出来事は、あなたにとって不快な出来事でしたか？快い出来事でしたか？」という教示文と（1：不快 - 4：快

い)の評定尺度が印刷されていた。さらにその下に、想起された出来事の特異性について問う「この出来事は、あなたにとってあまりおこらない特別な出来事ですか?ありふれた出来事ですか?」という教示文と(1:特別な-4:ありふれた)の評定尺度が印刷されていた。最後に、「この出来事のほかに、何か思い出した出来事がありましたか?思い出した出来事を全てお書きください」という教示文とそれに対する回答欄が印刷されていた。その後の10枚目から12枚目までは、他の刺激語について、同じ質問項目を記した用紙が続いていた。

## 2. 4 手続き

実験は、授業時間内に集団形式で行った。まずはじめにネガティブ語10種類、ポジティブ語12種類の冊子を均等になるように配布した。その結果、ネガティブ語条件の被験者は35人、ポジティブ語条件の被験者は38人となった。実験では、まず、SD法による単語の印象評定(ダミー課題)をおこない、その後、単語の印象評定の間に不随意に想起した自伝的記憶の性質を問う質問について、被験者に回答させた。

刺激語の印象評定では、あることばがどのような印象をもつか調べることが調査の目的であると説明した。この時点では、記憶の課題であるということは知らせていなかった。刺激語の印象を評定する時には、ことばのもつイメージではなく、ことばそのものを評定するよう強調した。これは、被験者が刺激語から自伝的記憶を意図的に想起し、その記憶をもとに印象評定を行うことを防ぐためであった。被験者は、練習として一語に対する評定を行った後、刺激語の評定を行った。ひとつの刺激語が呈示されてから、次の刺激語が呈示されるまでの時間は90秒であった。時間は、実験者がストップウォッチで測定し、刺激語の評定開始と終了を告げることで統制した。被験者には、指示があるまでページをめくらないよう指示した。

4語の刺激語の印象評定に続いて、無意図的に想起された自伝的記憶の性質を調べる設問に移った。ここで、本実験の目的が、課題を行っている最中に意図せずして想起された記憶について調べることであったことを文面で明らかにした。以後の回答では、時間は統制しなかった。6枚目の用紙で被験者は、自伝的記憶が無意図的に想起されたか、また、想起がされた場合はどのくらい鮮明に思い出したかについて評価した。その際、自伝的記憶が複数想起された場合には、一番はじめに思い出したものを評価の対象とするよう教示した。7枚目の用紙では想起された出来事的具体な

内容について、回答例(小学校のとき、学芸会でさかなの役をやって誉められ嬉しかった)にならい、文字で記述するよう求めた。8枚目の用紙からは、被験者に、想起された出来事について、その鮮明度、出来事が起こった時期、出来事に対する感情価、出来事の特異性について評定させた。また、刺激語から複数の出来事を想起した場合は、その内容を文字で記述させた。最後に、この実験は、無意図的に想起された自伝的記憶の性質を調べることが目的であったことを口頭で伝えた。その上で、ことばの印象評定を行なう際に、本実験が記憶の実験であると気がついていた場合は、その旨を文字で記すよう要求した。実験にかかった時間は、およそ30分であった。

## 3. 結果

本実験が記憶の実験であると気がついていたかを問う質問に対し、「気がついていた」と答えた被験者は0人であった。そこで、すべての被験者を対象に分析を行った。想起率の分析に先立ち、それぞれの被験者の報告した記憶が自伝的記憶であるか否かについて、実験者を含む大学院生3名が評価した。まず、なにかを思い出したと答えていても、内容の記述がない場合は、自伝的記憶が想起されなかったものと判断した。更に、想起した出来事についての記述があっても、時期が特定できない場合は同様に想起されなかったものとして判断した。さらに、自伝的記憶の定義(自分が直接経験したものや、感情が喚起された自己にとって重要な出来事の記憶)にあわないと考えられる記憶の記述も「想起なし」と判断した。こうした評価を3名が別個に行い、全員が一致して自伝的記憶ではないと判断したものを「想起なし」として扱い、それ以外を自伝的記憶の想起が得られたものとした。表1に、平均想起率・想起された出来事の感情価・特異性・鮮明度について示す。

表1. 平均想起率(%), ならびに想起された出来事の感情価・特異性・鮮明度の平均値

刺激語	ネガティブ	ポジティブ
想起率	56.6 (40.5)	70.5 (36.0)
感情価	1.8 (0.7)	3.1 (0.6)
特異性	1.7 (0.5)	2.4 (0.7)
鮮明度	2.0 (0.6)	1.9 (0.6)

\*括弧の中は標準偏差値

### 3. 1 想起率

自伝的記憶の想起の有無・鮮明度について問う質問に対し、2：ややぼんやりと思い出した、3：ぼんやりと思い出した、4：はっきりと思い出した、のいずれかに○をつけた場合に、自伝的記憶の想起があったとみなした。4つの単語全てに記憶が想起された場合を想起率100%とし、各被験者からどのくらいの割合で想起が得られたかという想起率を求めた。被験者全体の平均想起率は64.0% (SD = 36.3) であった。次に、刺激語条件ごとに平均想起率を求めた。その結果、ネガティブ語条件の平均想起率は56.6% (40.5)、ポジティブ語条件の平均想起率は70.5% (36.0) であり、ポジティブ語条件のほうが、ネガティブ語条件よりも想起率が高かった。しかし、統計検定の結果、ポジティブ語条件とネガティブ語条件の平均想起率に有意差は認められなかった ( $F(1, 71) = 2.72$ )。

### 3. 2 想起された出来事感情価

ネガティブ語とポジティブ語から想起された記憶の感情価について検討した。感情価の値は、高いほど快い内容の記憶であることをあらわす (範囲は1～4)。ネガティブな刺激語から想起された記憶の感情価は1.8 (SD = 0.7) であり、ポジティブな刺激語から想起された記憶の感情価は3.1 (0.6) であった。記憶の感情価は、ポジティブ語のほうがネガティブ語よりも有意に高かった。 ( $F(1, 71) = 59.88, p < 0.01$ )。すなわち、ネガティブな刺激語からは不快な記憶を想起しやすく、ポジティブな刺激語からは快い記憶を想起しやすいという結果になった。ネガティブな刺激語から想起された記憶のうち、不快な出来事であると評価された記憶の割合は79.2%であり、ポジティブな刺激語から想起された記憶のうち、快い出来事であると評価された記憶の割合は76.4%であった。

### 3. 3 想起された出来事特殊性

ポジティブ語・ネガティブ語から想起された内容が、滅多に起こらない特別な出来事か、日常的に経験するありふれた出来事であるかについて調べた。特殊性の値は小さいほどめったにおこらない特別な出来事を想起したことをあらわす (範囲1～4)。ネガティブ語条件の特殊性は1.7 (SD = 0.5) であり、ポジティブ語条件の特殊性は2.4 (0.7) であった。刺激語を要因として統計検定を行ったところ、有意差が認められた ( $F(1, 71) = 16.22, p < 0.01$ )。すなわち、ネガティブ語条件のほうが、ポジティブ語条件よりも、より特別な内容が想起されたという結果になった。

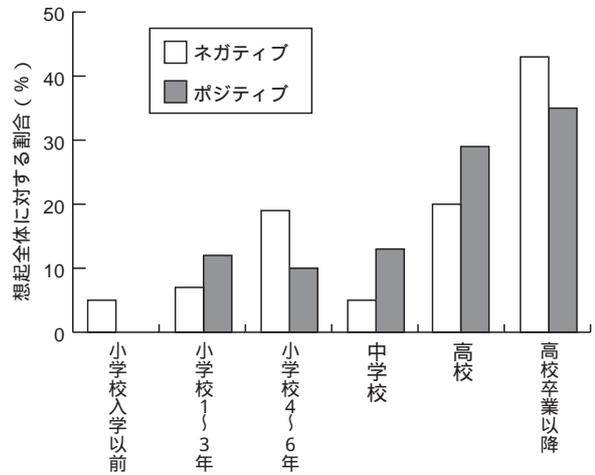


図1. 想起された出来事が起こった時期

### 3. 4 想起された出来事の起こった時期

ネガティブ語条件とポジティブ語条件のそれぞれについて、想起された出来事がどの時期に起こったものか、想起された記憶全体に占める割合を求めた (図1)。ネガティブ語条件は、高校卒業以降のものが最も多く全体の43.2%、ついで高校生の際のものが20.3%、小学校高学年のものが18.9%であった。これに対して、ポジティブ語条件は、高校卒業以降のものが最も多く全体の35.2%、次に高校生のときのもの28.7%、中学生のときのもの13.9%であった。

### 3. 5 想起された出来事鮮明度

ネガティブ語条件とポジティブ語条件のそれぞれについて、出来事がどのくらい鮮明に想起されたのか調べた。鮮明度は値が大きいほど、はっきりと思い出したことをあらわす (範囲1～3)。ネガティブ語条件の平均鮮明度は2.0 (SD = 0.6)、ポジティブ語条件の鮮明度は1.9 (0.6) であった。統計検定の結果、ネガティブ語条件とポジティブ語条件の想起の鮮明度には、有意差は認められなかった ( $F(1, 71) = 1.29$ )。

## 4. 考察

本研究の第一の目的は、自伝的記憶の無意図的な想起を実験的に扱うための手法を確立することであった。実験では、まずSD法による手がかり語の印象評定 (ダミー課題) を行った。印象評定終了後、課題を行っている最中に、自伝的記憶が意図せずして想起されたか否かを、思い出して報告することを被験者に求めた。被験者ごとに想起率をもとめた結果、平均64%という高い想起率が得られた。また、想起された内容は、

手がかり語から喚起された単なるイメージや言葉の意味ではなく、自己に深いかわりをもつ出来事の記憶、すなわち自伝的記憶であることが確認された。これらのことから、本実験で用いた手法は、自伝的記憶の想起をひきだす有効な手続きであったといえることができる。

しかし、本実験で得られた結果を、自伝的記憶の無意図的な想起を反映したものとして扱う前に、考察すべき点が2つある。まず、ひとつは、本研究において想起された自伝的記憶が本当に無意図的に想起されたものなのかということである。本実験では、手がかり語の印象評定をダミー課題として用いた。そのため、被験者は印象評定を行うために、過去の出来事を積極的に思い出していた可能性が考えられる。例えば、「通夜」ということばの印象を評定するために、過去に経験した祖父の葬儀などを意図的に思い出して、その記憶に対する印象をもとに評定を行ったということが考えられる。すなわち、実験では想起を求めていなかったにもかかわらず、印象評定という課題の性質により、被験者が意図的な想起を行いやすくなったのかもしれない。この可能性について検討するために本実験と同じ手続きで追加の実験を行い、被験者(15名)に対し、課題を行っていた間に過去の出来事を思い出そうとしたか質問をした。実験の結果、自伝的記憶の想起率は83%であったが、これらを印象評定中に意図的に想起したと報告した被験者はいなかった。従って、本実験の手続きから得られた記憶は、無意図的に想起されたものであったといえることができる。

もうひとつ検討すべき点として、手がかり語の印象評定課題が、正しくダミー課題の役割を果たしていたかということがあげられる。被験者が印象評定中に、本研究の目的に気がついた場合、実験者の意向に添う形で積極的に自伝的記憶を想起しようとする可能性が考えられる。しかしながら、本実験では、実験の目的に気が付いていたかという質問に対し、気が付いていたと報告した被験者はいなかった。したがって、印象評定課題は、ダミー課題の役割を正しくはたしていたと考えられる。以上の結果から、本実験で用いられた手続きは自伝的記憶の無意図的な想起を実験的に扱う手法として、有効なものであったと考えられる。この手続きで得られた想起が、日常場面で観察される自伝的記憶の無意図的な想起と、まったく同じものであると断定することはできない。しかし条件を統制して、自伝的記憶の無意図的な想起について検討する方法としての価値は高いといえるだろう。

本研究の第二の目的は、快い出来事と不快な出来事

のどちらが無意図的に想起されやすいかについて検討することであった。そのために、自伝的記憶の想起を促す手がかり語の感情価を操作した。一般的に「通夜」のようなネガティブな刺激語からは、祖父の通夜のような不快な出来事が、「結婚」のようにポジティブな刺激語からは、友人の結婚式のような快い出来事が想起されることが予想される。実験の結果、ネガティブな単語からは不快な出来事が想起され、ポジティブな単語からは快い出来事が想起される傾向が認められた。従って、自伝的記憶の想起を促す手がかり語の感情価を操作し、それに一致した感情価を持った出来事を想起させた本実験の手続きは、妥当なものであったと考えられる。

次に、不快な出来事と快い出来事は、どちらが無意図的に想起されやすいかについて考察する。本研究では、ポジティブ語条件の想起率のほうがネガティブ語条件の想起率よりも高いという結果が得られた。これは、日誌法により、自伝的記憶の無意図的な想起の性質を検討したBerntsen (1996)の結果と一致するものである。しかし、平均想起率に差はみられたものの、統計検定において有意な差はみとめられなかった。このことから、自伝的記憶の無意図的な想起においては、快い出来事も不快な出来事も想起しやすさには差がないと考えることができる。日誌法をもちいた先行研究では、快い出来事のほうが不快な出来事よりも想起されやすいという結果が得られている (Berntsen, 1996)。その一方で、不快な出来事のほうが快い出来事よりも想起率が高いという研究 (神谷, 2003) もあり、矛盾した結果となっている。本研究の結果から、日誌法を用いた先行研究でみられた想起率の差は、自伝的記憶の無意図的な想起の性質を反映したものではなく、人生経験などの個人差がデータに影響したものであると解釈できる。

これに対し、自伝的記憶の無意図的な想起に影響を与える他の要因があり、その要因が交絡していたために、本来出るべき差が出なかったという可能性も考えられる。本実験では、ネガティブ語条件のほうが、ポジティブ語条件よりも想起された出来事の特異性が高いという結果が得られた。この結果は2つの解釈が可能である。ひとつは、自伝的記憶の一般的性質として、不快な出来事として思い出されるものは、快いものに比べて特別な内容であるという可能性である。しかし、もうひとつの解釈として、刺激語の選定の段階で、ネガティブ語とポジティブ語の特異性に差があったという可能性も考えられる。すなわち、本実験でネガティブ語として選定した単語が、特殊な内容を表すものが

多かったため、ネガティブ語条件で想起された記憶の特殊性が高くなってしまったという可能性である。

神谷 (2003) は、特別な出来事のほうが、ありふれた出来事よりもよく想起されると報告している。この点を検討するために、追加実験において、それぞれの刺激語の想起について内観を求めたところ、特別な出来事 (例：通夜, 死亡) ほうが、日常的な出来事 (例：快晴, 満点) よりも、想起が起こりやすかったという報告が多数得られた。また、ネガティブ語条件には、特別な内容を表す刺激語が多いのではないかという見解も報告された。そのため、実験者の判断で、ネガティブ語条件とポジティブ語条件の刺激語から「特別な内容を表すと考えられる刺激語」を抜き出した結果、特別な内容をあらわすと考えられるネガティブ語は6語 (死亡, 通夜, 病室, 墓地, 火災, 罰金)、特別な内容をあらわすと考えられるポジティブ語は4語 (進学, 結婚, 満点, 首位) であり、ネガティブ語条件のほうがポジティブ語条件よりも、特別な内容をあらわすと考えられる刺激語の数が多かった。

これらの結果から、本実験で快い出来事と不快な出来事の想起率に有意な差がみられなかったのは、感情価の効果に「出来事の特異性」という要因が交絡していたのではないかと考えられる。すなわち、特別な内容を表す刺激語が、ポジティブ語群よりもネガティブ語群に多く入っていたために、ネガティブ語群の想起率が上がってしまい、その結果として、感情価の効果が相殺されたのではないだろうか。したがって、本実験の結果のみから、不快な出来事と快い出来事のどちらが想起されやすいのか、また、両群の想起しやすさに差はないのかを特定することは難しい。今後、手がかり語の表す内容の特異性を統制した実験を行なうことで、快い出来事と不快な出来事のどちらが、無意図的に想起されやすいかを検討する必要があるだろう。

## 結論

本研究では、自伝的記憶の無意図的な想起を実験的に研究する新たな手続きが考案された。しかし、不快な出来事と快い出来事のどちらが想起されやすいかについては、快い出来事のほうが、不快な出来事よりも想起されやすいと結論づけるに至らなかった。その理由として、手がかり語の表す内容の特異性という要因が交絡していた可能性が考えられた。特異性を統制した実験により、不快な出来事と快い出来事のどちらが想起されやすいかについて、さらなる検討をしていく必要があるだろう。今後、本研究で考案した手法を用い、様々な要因を統制した詳細な実験的検討を行う

ことで、自伝的記憶の無意図的な想起の性質が明らかになっていくと期待される。

## 引用文献

- 天野成昭・近藤公久 (1999). 日本語の語彙特定 (NTTデータベースシリーズ1), 三省堂.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied cognitive psychology*, 10, 453-454.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory* (pp. 25-49). Cambridge: Cambridge University Press.
- 五島史子・太田信夫 (2001). 漢字二字熟語における感情価の調査. 筑波大学心理学研究, 23, 45-52.
- 神谷俊次 (1994). 自伝的記憶の安定性. アカデミア人文・社会科学編, 59, 119-135.
- 神谷俊次 (2003). 不随意記憶の機能に関する考察—想起状況の分析を通じて. 心理学研究, 印刷中.
- Salaman, E. (1970). A collection of moments. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed: Remembering in natural context* (pp. 49-63). San Francisco: Freeman.
- Steckle, L. C. (1945). Again-affect and recall. *Journal of Social Psychology*, 22, 103-106.
- Wagener, W. A. (1986). My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, 18, 225-252.
- Waldfoegel, S. (1945). The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, 62, 39.